

第5章 20代後半層の職業意識の推移と変化

第1節 はじめに

本章は20代後半層の職業意識の変化について、2001年、2011年、2016年の調査に基づき確認する¹。90年代半ば以降に若者の移行が不安定化して以降、たびたび職業意識とキャリアについての関係は論じられてきたが、実証的な調査に基づく議論はそれほどなされてこなかった。正社員の調査としては1971年より新人研修に参加した新入社員に実施されている調査（公益財団法人 日本生産性本部「働くことの意識」調査 平成28年度は新社会人研修村に参加した企業の新入社員に対して、同研修村入所の際に各企業担当者を通じて調査票を配布し、その場で回収。有効回収数：1,286人（男性788人／女性497人／性別無回答1人）がよく知られている。「働くことの意識」調査によれば、新入社員の働く目的として、社会に役立とうとする意識や楽しい生活をしたいという意識が高まり、自分の能力をためすという目的が低下している。

しかし正社員以外の様々な就業形態を含んだ時系列的な職業意識に関する時系列的調査はあまり存在しておらず、わずか15年の変化ではあるものの移行が不安定化した90年代以降に同じ項目で3回実施している本調査は稀少だと言える。

ところで本調査の職業意識の調査項目は、主として4つのタイプを想定して進めてきた。この4つのタイプは2001年の20代を対象とした調査から見出されたものである。

- ・「フリーター共感」
 - ・今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける
 - ・若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい
 - ・いろいろな職業を経験したい
 - ・やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない
 - ・フリーターより正社員で働いたほうがトクだ（－）
 - ・一つの企業に長く勤めるほうがよい（－）

このタイプについては、フリーターに対する肯定的意識と否定的意識の双方を含めて「フリーター共感」と呼んでいる。（－）のついた項目は4件法を基にした総合得点の分析の際には逆向きに（「1そう思う」を「4そう思わない」「2ややそう思う」を「3あまりそう思わない」「3あまりそう思わない」を「2ややそう思う」「4そう思わない」を「1そう思う」として）計算している。

¹ 2006年調査には該当項目がないため分析はできない。

- ・「栄達志向」
 - ・ 将来は独立して自分の店や会社を持ちたい
 - ・ 有名になりたい
 - ・ ひとよりも高い収入を得たい

- ・「能力向上志向」
 - ・ 専門的な知識や技術を磨きたい
 - ・ 職業生活に役立つ資格を取りたい
 - ・ ひとの役に立つ仕事をしたい

- ・「仕事離れ・迷い」
 - ・ 将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい
 - ・ 自分に向いている仕事が見つからない
 - ・ できれば仕事はしたくない

本章の構成は以下の通りである。次節では全体の推移を確認し、3節で学歴別、4節で現職の雇用形態、5節ではフリーター経験の有無、6節では4つのタイプの総合得点を軸として分析する。なおデータについては過去の調査と比較が可能なように20代後半層、かつ専業主婦や学生を除いて分析を行うことにする。

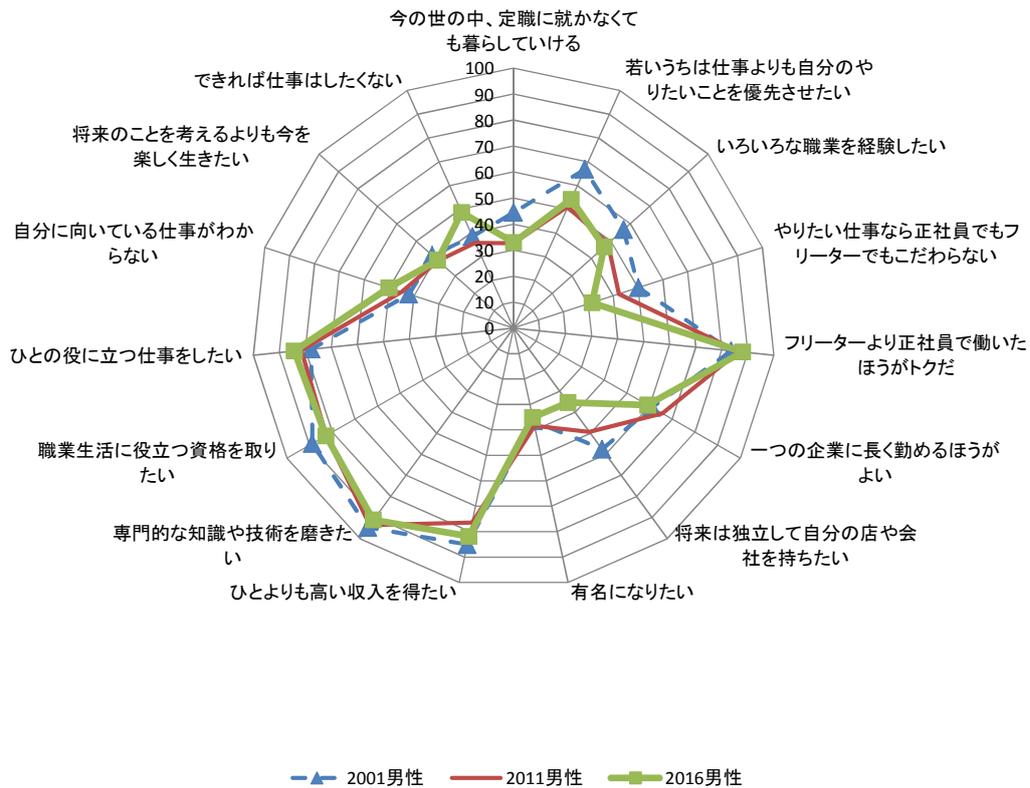
第2節 職業意識における15年の変化

本節では20代後半層の職業意識の変化について記述する。

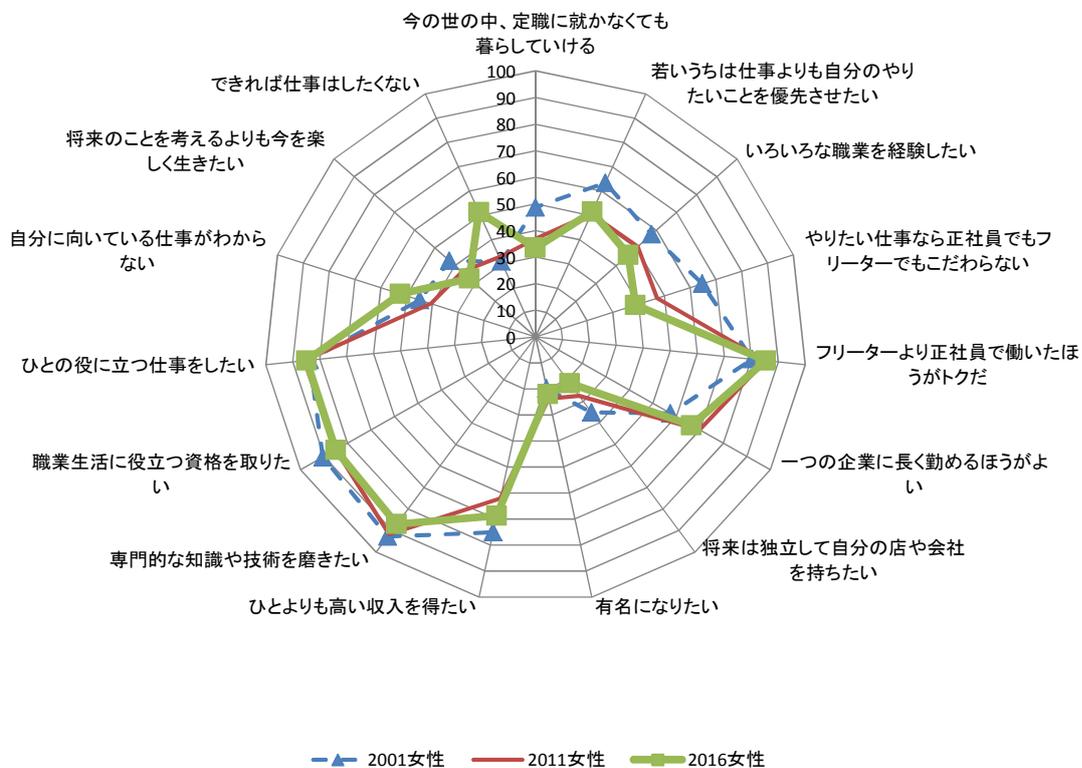
20代後半層の男性については、「フリーター共感」に関わる項目、また「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」「職業生活に役立つ資格を取りたい」が減少し、「できれば仕事をしたくない」という項目が上昇した。女性についてもほぼ同じような傾向が見られるが、女性の場合には「専門的な知識や技術を磨きたい」においても減少している。

すなわち20代後半層については男女とも「フリーター共感」傾向が全体として低下し、独立志向（「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」）、資格志向（「職業生活に役立つ資格を取りたい」）、女性はさらに専門志向（「専門的な知識や技術を磨きたい」）が減少し、仕事離れ（「できれば仕事をしたくない」）という項目が上昇した。

図表5-1 20代後半層の職業意識の変化（男性）



図表5-2 20代後半層の職業意識の変化（女性）



第3節 学歴別の傾向

学歴別の傾向を整理する。図表5-3はサンプルサイズが大きい代表的な学歴をとりだして示したものである。学歴ごとの差異はそれほど大きくない。

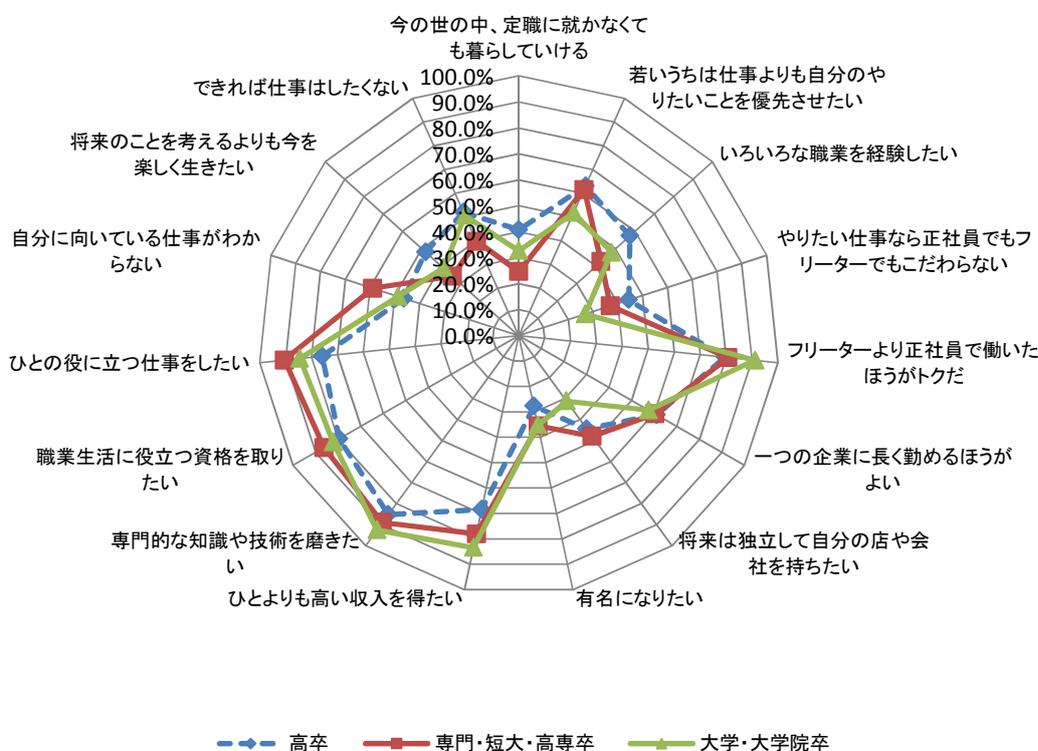
高卒の特徴は「フリーター共感」傾向が高く、「栄達志向」（特に「有名になりたい」「ひとよりも高い収入を得たい」）や能力向上志向（「専門的な知識や技術を磨きたい」「職業生活に役立つ資格を取りたい」「ひとの役に立つ仕事がしたい」）が低くなっている。

大学・大学院卒は「フリーター共感」傾向や独立志向（「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」）が弱い。他方で「できれば仕事をしたくない」という回答も多くなっている。

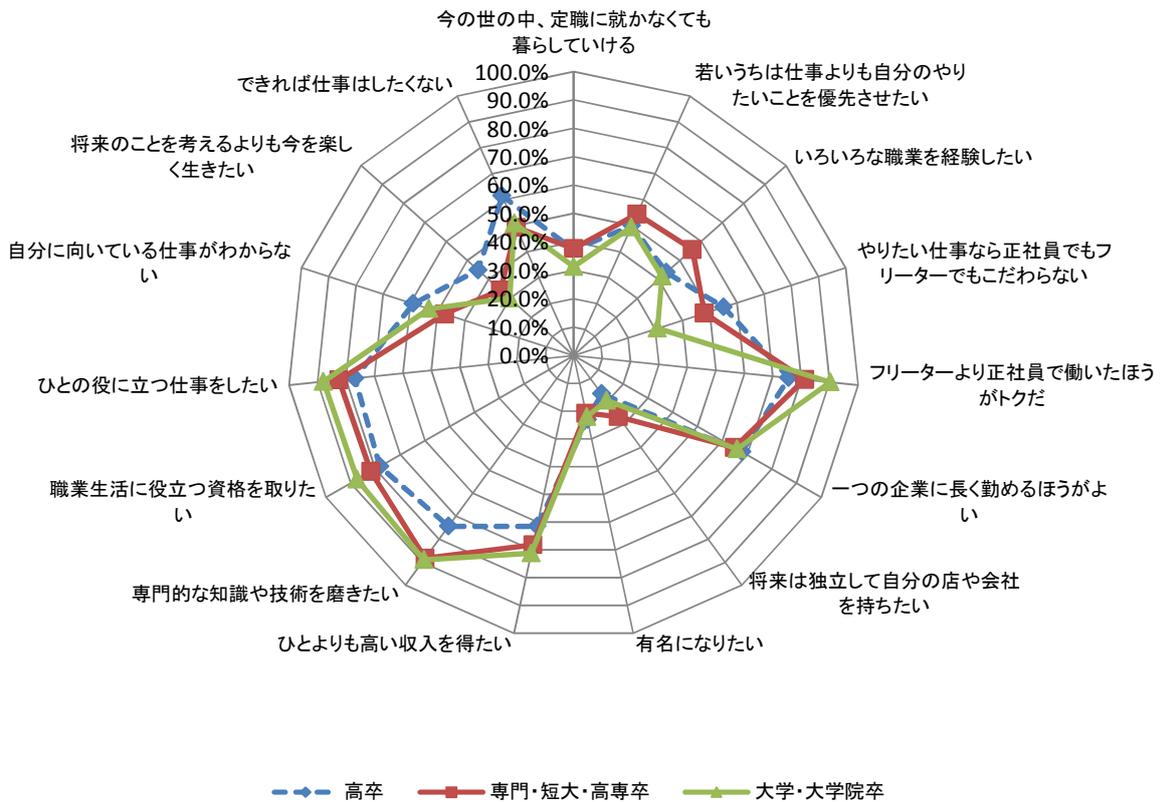
女性について学歴別に見ると、男性に比べて差が小さいが、専門短大高専卒が特徴的である。専門短大高専卒は「フリーター共感」傾向が高いが「一つの企業に長く勤めるほうがよい」とも思っており、女性の中では独立志向が高い。ただし「職業生活に役立つ資格を取りたい」は低くなっている。

高卒は能力向上志向が弱く、「仕事離れ・迷い」において高くなっている。高卒者の仕事が製造業中心になる中で、女性高卒者の労働市場に置かれた困難さを示唆しているようにも解釈できる。大学・大学院卒においては「フリーター共感」傾向が極めて弱く、「能力向上志向」が高くなっている。

図表5-3 学歴別・男性（2016年調査）



図表5-4 学歴別・女性（2016年調査）



第4節 現職の就業形態による傾向

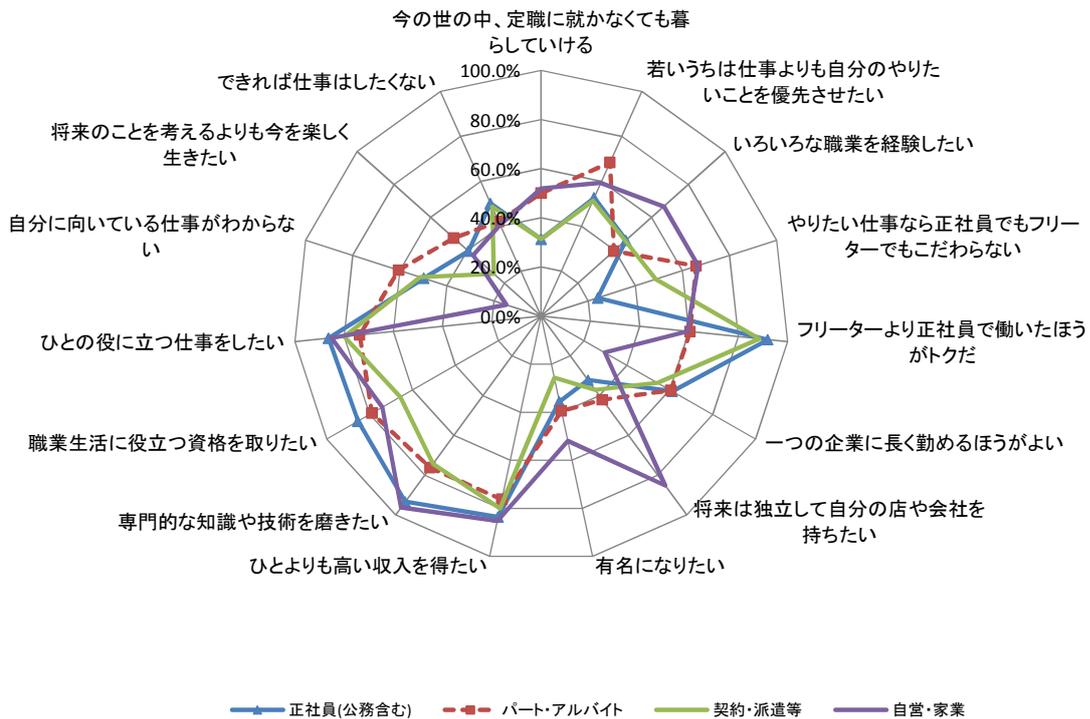
次に現職の就業形態についての分析を行う。

20代後半男性においてもっとも特徴的なのは「自営・家業」であり（図表5-5）、対照的な位置にあるのが「正社員（公務員含む）」は全体として「フリーター志向」が弱く、独立志向は弱い。また能力向上志向は高くなっているが、「できれば仕事はしたくない」は他の就業形態と同水準になっている。

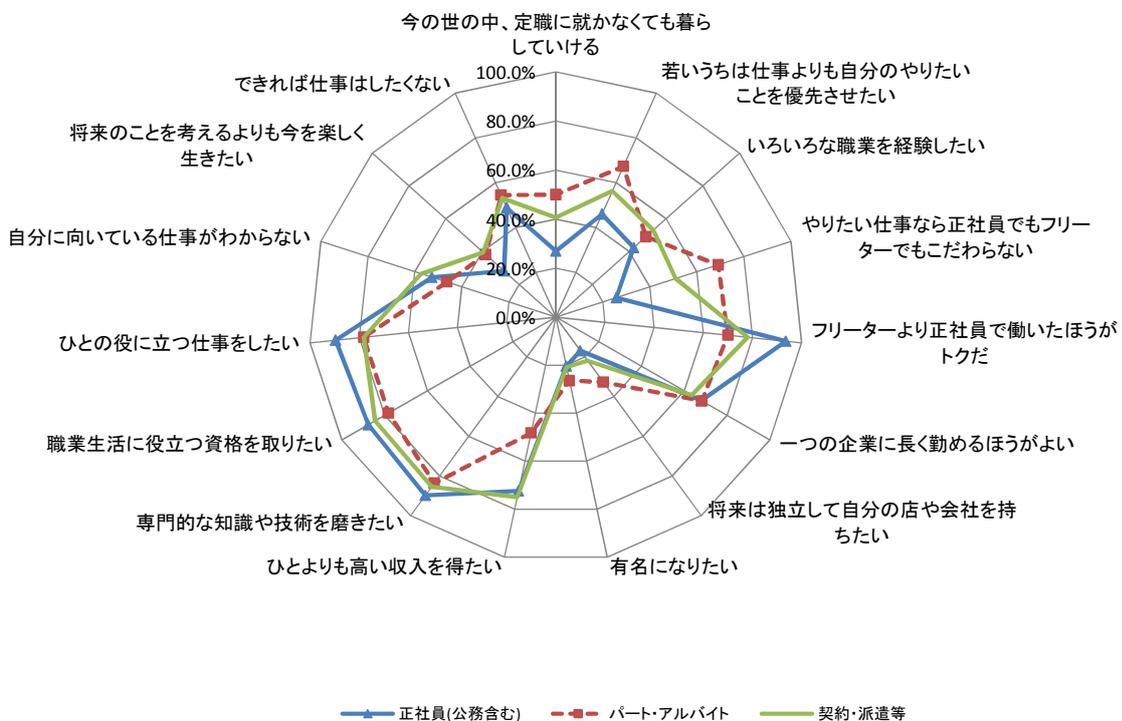
「パート・アルバイト」は「フリーター共感」傾向が高くなっている。「契約・派遣等」は「パート・アルバイト」に類似しているが「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」は高くなっており、「パート・アルバイト」よりもこだわりがあるように見えるが、資格志向は弱い。

20代後半女性においては（図表5-6）「自営・家業」のサンプルサイズが小さかったため示していない。「パート・アルバイト」は「フリーター共感」傾向が高く「能力向上志向」は弱い、独立志向は高くなっている。正社員は「フリーター共感」傾向は極めて弱く「能力向上志向」が高くなっているが、「自分に向いている仕事がわからない」「できれば仕事はしたくない」においても高くなっているのが特徴である。「契約・派遣等」は男性とは異なり、正社員とパート・アルバイトの中間に位置している。

図表 5-5 就業形態別・男性（2016年調査）



図表 5-6 就業形態別・女性（2016年調査）



第5節 フリーター経験の有無

フリーター経験の有無によって職業意識は異なるのか。まず2016年調査の傾向を確認し、3時点の比較を行う（図表5-7、5-8）。

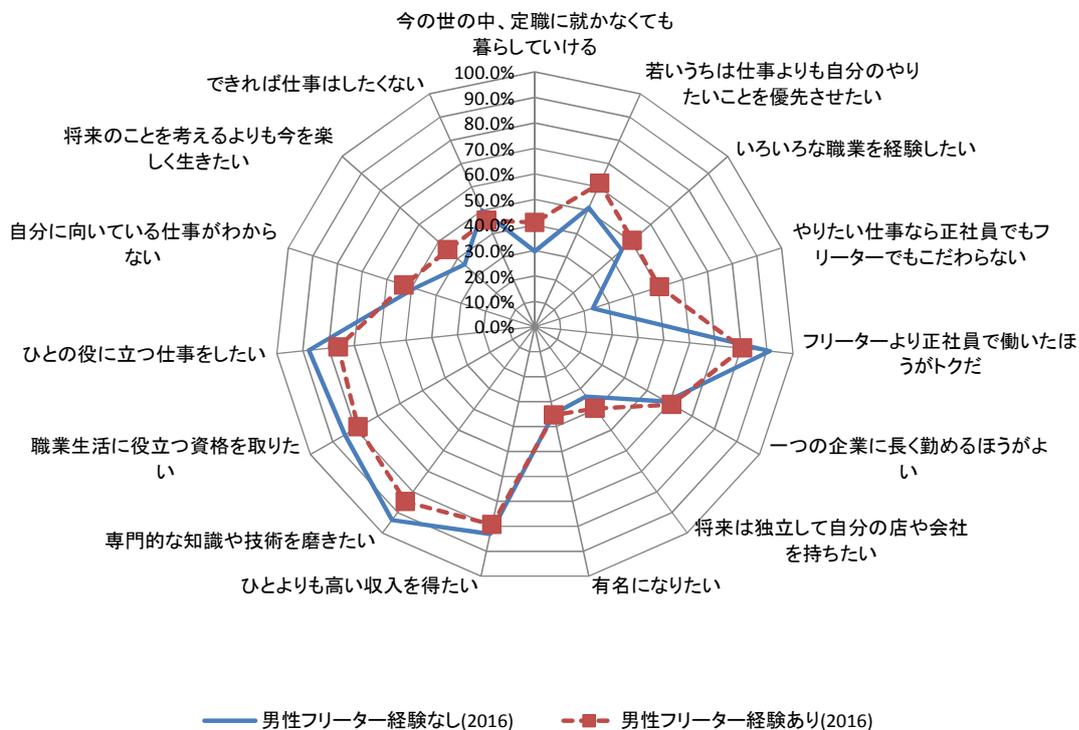
2016年調査においては男女ともこれまでと同様にフリーター経験ありの方が「フリーター共感」傾向が高かった。ただし「一つの企業に長く勤めるほうがよい」について同水準であり、また男性においてはフリーター経験がない方が「できれば仕事はしたくない」割合が高くなっていた。

3時点について「フリーター経験なし」（図表5-9、5-10）「フリーター経験あり」（図表5-11、5-12）で比較してみると、フリーター経験なしの変化の特徴は、かつては経験がなくとも広がっていた「フリーター共感」傾向がかなり弱まり、他方で独立志向が低下し、「できれば仕事をしたくない」割合が高まっていることである。

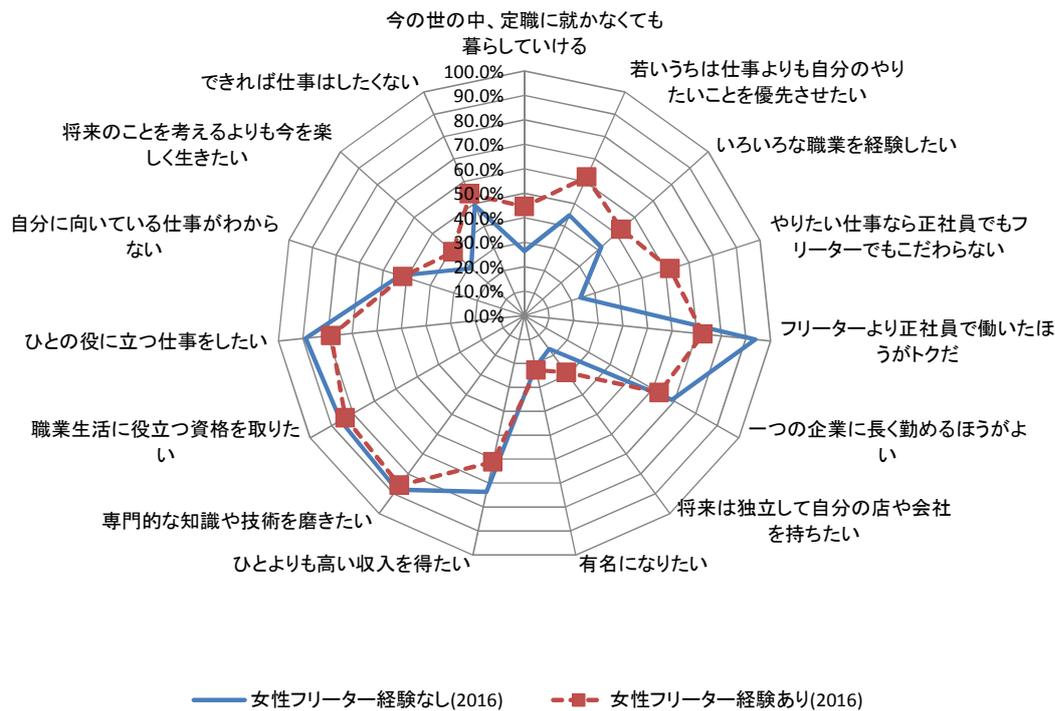
フリーター経験有においては「フリーター共感」傾向がかつてよりも弱まると共に、独立志向や資格志向がはっきり低下していることが見て取れる。

2011年に実施した30代の調査では30代になっても資格志向の高さは維持されていたので、資格志向の強さは2001年調査の時に若者だった世代の特性ではないかと考えられる。

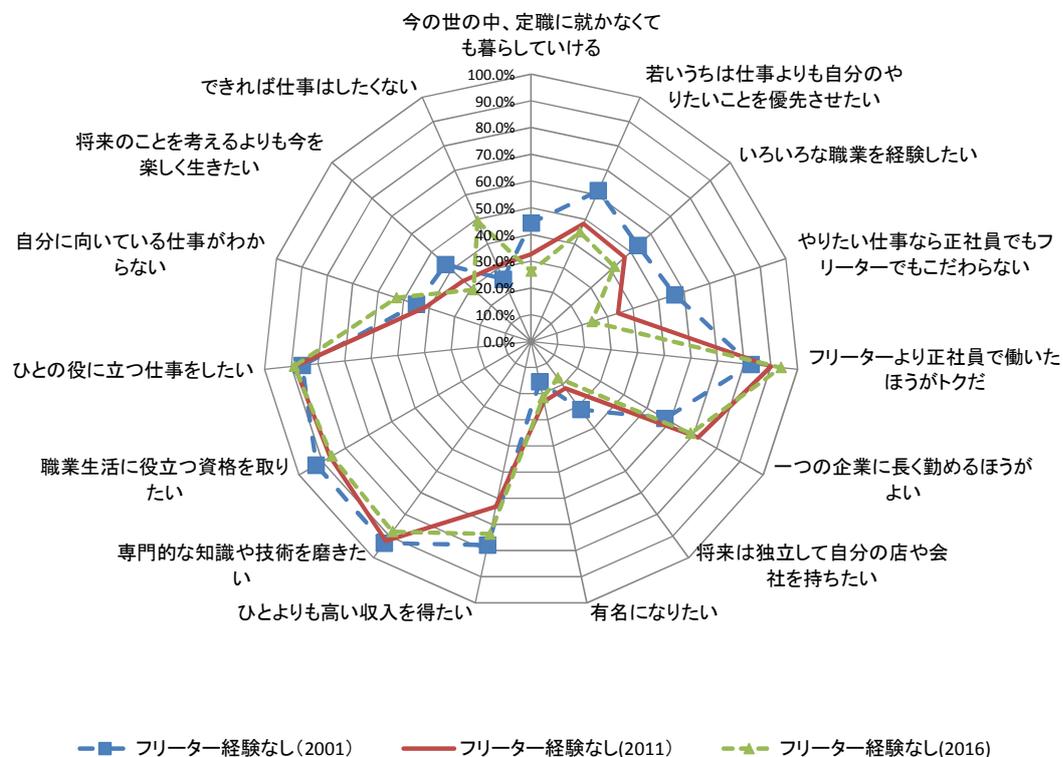
図表5-7 フリーター経験の有無による職業意識の差異・男性（2016年調査）



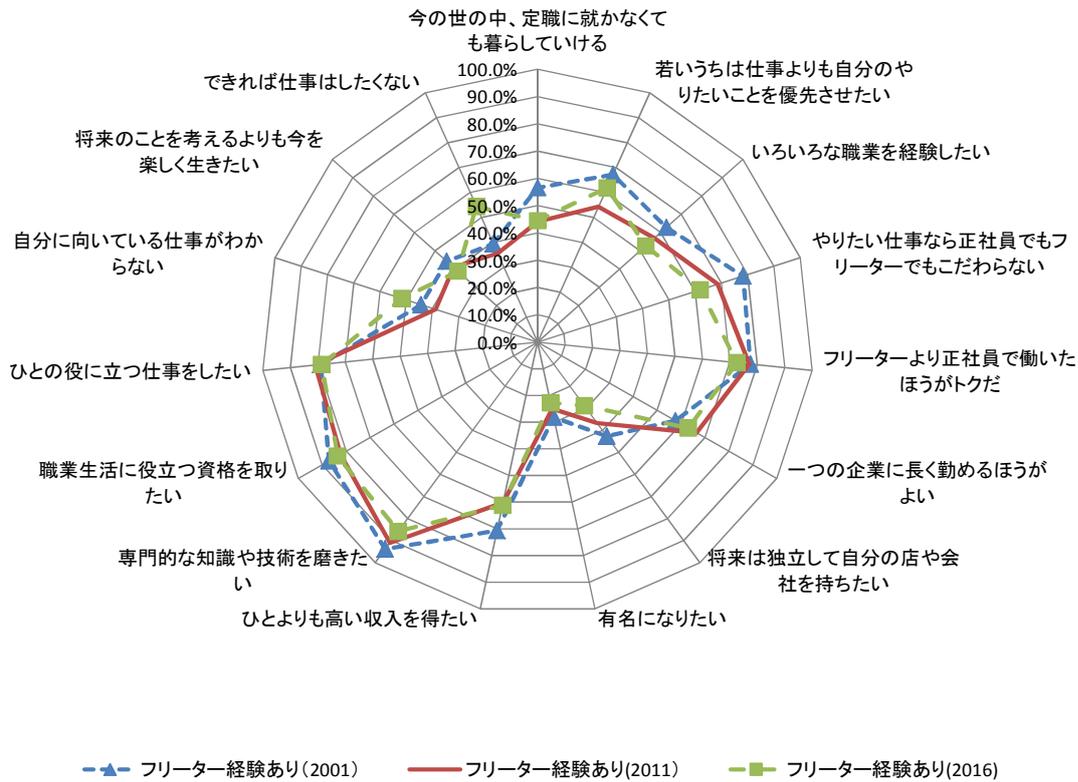
図表 5-8 フリーター経験の有無による職業意識の差異・女性（2016年調査）



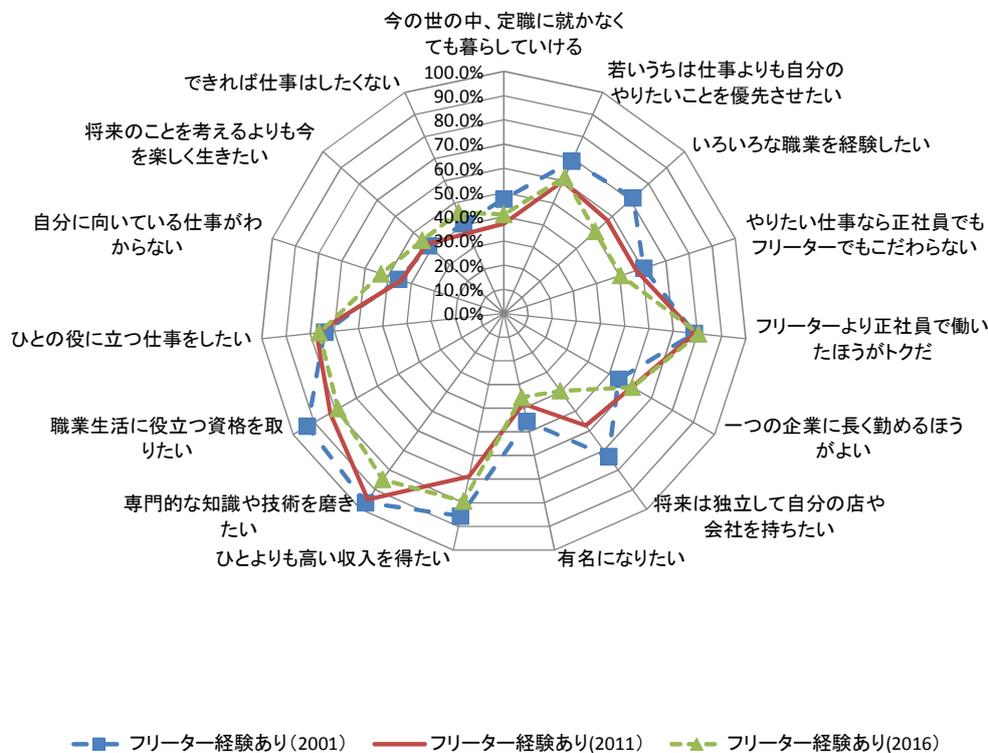
図表 5-9 フリーター経験無の職業意識の変化（2001年、2011年、2016年：男性）



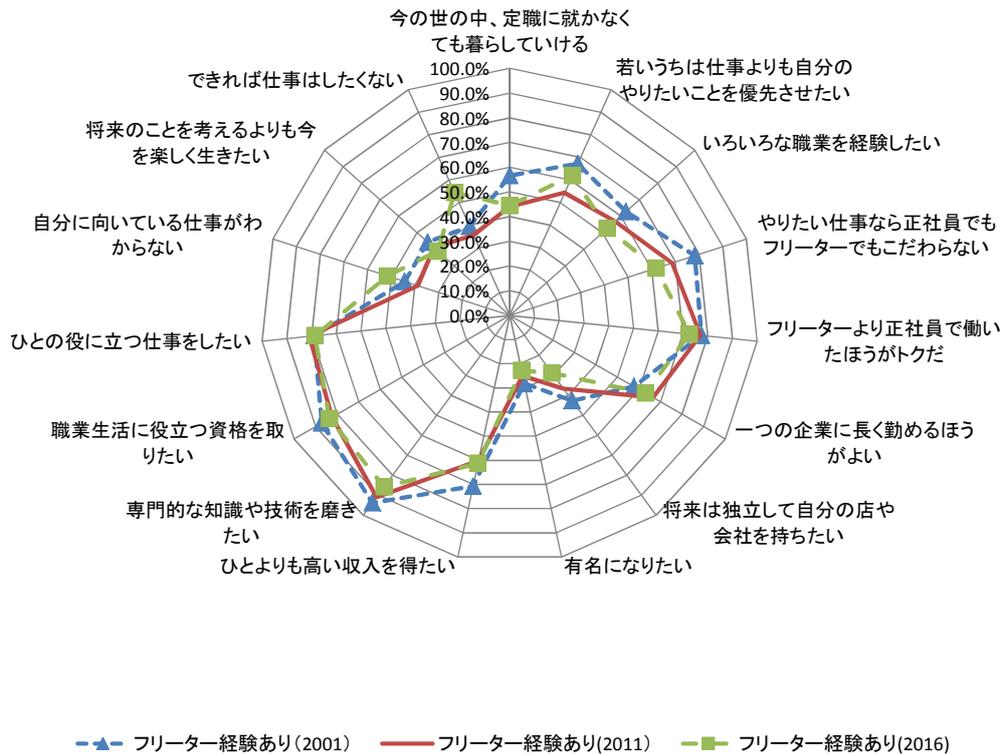
図表5-10 フリーター経験無の職業意識の変化（2001年、2011年、2016年：女性）



図表5-11 フリーター経験有の職業意識の変化（2001年、2011年、2016年：男性）



図表 5-12 フリーター経験有の職業意識の変化（2001年、2011年、2016年：女性）



第6節 4つのタイプの集約

上述したように、本調査では「フリーター共感」「栄達志向」「能力向上志向」「仕事離れ・迷い」という4つのタイプを念頭において進めてきた。最後に4つのタイプを集約した平均点による分析を行う。これまで分析してきたそれぞれの調査項目について、「1 そう思う」を4点、「2 ややそう思う」を3点、「3 あまりそう思わない」が2点、「4 そう思わない」1点として、平均値を属性ごとに算出した²。

図表5-13によれば、2001年の20代後半層に比べると2016年の20代後半層においては、男女とも「フリーター共感」が特に弱まっていた。また「能力向上志向」もわずかだが減少している。他方で「栄達志向」は漸増し、他方で男性の「仕事離れ・迷い」が減少していた。

2016年調査について学歴別に見ると、男性高卒で「フリーター共感」「仕事離れ・迷い」が高く、中卒・高校中退者および高等教育中退者で「栄達志向」が高かった。女性については高卒者で「仕事離れ・迷い」が高く、大学・大学院卒で「能力向上志向」が高かった。また男性同様に中退者で「フリーター共感」「栄達志向」が高くなっていた。

² 「フリーターよりも正社員で働いたほうがトクだ」「一つの企業に長く勤めるほうがよい」については、「1 そう思う」を1点、「2 ややそう思う」を2点、「3 あまりそう思わない」が3点、「4 そう思わない」4点としている。2001年調査についても再集計した際に同様の取り扱いをしており、かつウエイトバックしたデータを用いた20代後半層の分析となっている。

図表5-13 学歴と4つのタイプ

		フリーター 共感	能力向上志 向	栄達志向	仕事離れ・ 迷い
男性	2001年調査	2.39	3.35	2.44	2.61
	2016年調査	2.16	3.33	2.53	2.43
	高卒	<u>2.35</u>	3.18	2.42	<u>2.54</u>
	専門・短大・高専卒	2.19	<u>3.37</u>	2.66	2.38
	大学・大学院卒	2.13	3.34	2.51	<u>2.44</u>
	中卒・高校中退	2.09	3.25	<u>2.82</u>	2.33
	高等教育中退	2.20	<u>3.46</u>	<u>2.67</u>	2.42
	在学中・その他	2.46	3.25	2.40	2.33
女性	2001年調査	2.52	3.36	2.16	2.44
	2016年調査	2.18	3.30	2.17	2.44
	高卒	2.25	3.10	2.10	<u>2.67</u>
	専門・短大・高専卒	2.28	3.31	2.18	2.41
	大学・大学院卒	2.12	<u>3.35</u>	2.16	2.43
	中卒・高校中退	2.26	<u>3.33</u>	<u>2.27</u>	2.32
	高等教育中退	<u>2.35</u>	3.15	<u>2.29</u>	2.27
	在学中・その他	2.63	2.93	2.18	2.53

※上位2項目に下線。

現在の就業形態別に見る(図表5-14)、男性において特徴的なのが自営・家業であり、「フリーター共感」「能力向上志向」「栄達志向」すべてにわたって高くなっている。男性パート・アルバイトは「フリーター共感」「仕事離れ・迷い」が高い。男性正社員は「能力向上志向」と「栄達志向」が高い。

女性の自営・家業も特徴的で男性と同様「フリーター共感」「能力向上志向」「栄達志向」すべてにわたって高くなっている(ただしサンプルサイズが小さい)。女性正社員は「能力向上志向」「栄達志向」とも高い。

図表5-14 就業形態と4つのタイプ

		フリーター 共感	能力向上志 向	栄達志向	仕事離れ・ 迷い
男性	正社員(公務含む)	2.09	<u>3.38</u>	2.51	2.45
	パート・アルバイト	<u>2.53</u>	3.07	<u>2.61</u>	<u>2.55</u>
	契約・派遣等	2.27	3.07	2.48	2.36
	自営・家業	<u>2.71</u>	<u>3.37</u>	<u>3.12</u>	2.02
	失業	2.12	3.19	2.00	<u>2.64</u>
	無業・その他	2.33	3.24	2.44	2.52
	合計	2.16	3.33	2.53	2.43
女性	正社員(公務含む)	2.05	<u>3.38</u>	2.15	2.41
	パート・アルバイト	<u>2.44</u>	3.21	2.18	2.45
	契約・派遣等	2.35	3.20	<u>2.19</u>	2.48
	自営・家業	<u>2.63</u>	<u>3.42</u>	<u>2.72</u>	2.36
	失業	2.29	3.07	2.12	<u>2.67</u>
	無業・その他	2.41	2.69	2.12	<u>2.78</u>
	合計	2.18	3.30	2.17	2.44

フリーター経験別に見ると(図表5-15)、2001年に比べて大きく変化したのはやはり「フリーター共感」であった。また男性については、フリーター経験有の方が「栄達志向」が高いのが2001年の特徴であったが、2016年にはフリーター経験なしにおいて「栄達志向」が上昇して差が縮まり、「仕事離れ・迷い」が減少しているという変化があった。女性については男性同様にフリーター経験有の方が「栄達志向」が高いのが2001年の特徴であったが、「能力向上志向」「栄達志向」はフリーター経験の有無に関わらず減少している。

図表5-15 フリーター経験と4つのタイプ

		フリーター共感		能力向上志向		栄達志向		仕事離れ・迷い	
		2001	2016	2001	2016	2001	2016	2001	2016
男性	フリーター経験有	2.71	2.35	3.27	3.23	2.53	2.57	2.55	2.48
	フリーター経験なし	2.29	2.08	3.37	3.38	2.37	2.51	2.60	2.40
女性	フリーター経験有	2.79	2.41	3.26	3.24	2.27	2.20	2.53	2.48
	フリーター経験なし	2.38	2.07	3.39	3.33	2.12	2.15	2.41	2.39

※0.1以上変化が見られた項目に網掛け

第7節 若者の職業意識の趨勢

第2章で確認したように、調査が開始された2001年の第1回調査において20代後半層であった「就職氷河期世代」のキャリアと比較すると、その後の世代のキャリアは全体として安定する方向にある。また高学歴化も急激に進み、調査対象者の大半を大卒者が占めるようになり、今回の調査結果は高学歴者の職業意識を反映するものであったと言える。

- ①全体の傾向としては、「フリーター共感」傾向は属性を問わず減少し、2001年当時に若者層に広がっていた「フリーター共感」傾向であるが、かつてと比較するとフリーター経験者にすら共有されにくくなっている。
- ②学歴別にみると、男性について高卒は「フリーター共感」が高く、「栄達志向」「能力向上志向」が低い。大学・大学院卒は「フリーター共感」も独立志向も低いが、「できれば仕事をしたくない」割合が高い。女性は高卒において「能力向上志向」が低く「仕事離れ・迷い」が高い。大学・大学院卒は「フリーター共感」で低く、「能力向上志向」が高くなっている。専門短大高専卒は「フリーター共感」が高く、独立志向が高い。
- ③就業形態別に見ると、自営・家業は雇用者とは全く異なっている。男女とも正社員は「フリーター共感」「独立志向」ともに弱く、「能力向上志向」は高いが、「できれば仕事をしたくない」は他類型と同水準か女性については高くなっている。パート・アルバイトは男女とも「フリーター共感」や独立志向が高い。契約・派遣等はあまり明確ではないが、女性については正社員とパート・アルバイトの中間に位置している。
- ④フリーター経験の有無別にみると、フリーター経験がなくても広がっていた「フリーター

共感」傾向は弱まり、独立志向は低下して「できれば仕事はしたくない」割合が高まった。フリーター経験者についても「フリーター共感」傾向が弱まり、独立志向や資格志向が低下した。なお「30代のワークスタイル調査」においては資格志向の高さが確認されているので、かつてのフリーターの資格志向の高さは世代の特徴であった可能性がある。

- ⑤全体の平均値から見ると、「フリーター共感」において特に減少が見られた。また2001年においてフリーター経験者の「栄達志向」はフリーター経験なしの者よりも高かったが、特に男性についてはフリーター経験なしの者について漸増し、差が縮小していた。

全体としてフリーター共感度が弱まったが、今でもフリーター経験者の方が非経験者よりも共感度合いは高い。「若者の就業形態が職業意識を規定する」あるいは「若者の職業意識が若者の就業形態を規定する」という逆の回路を含め、職業意識と就業形態を結ぶ回路はまだ存在していた。

しかしかつてのような新しい自由な働き方として「フリーター」に対して肯定的な意識を持ち、独立志向や資格志向を併せ持ったフリーター像は、現在「フリーター」と呼ばれる働き方をしている当事者にとっても過去のものとなったように見える³。「フリーター」が若年非正規労働者という就業形態を表象するカテゴリーに収斂していくかどうかは、次の5年後の調査結果を待つことになるだろう。

参考文献

公益財団法人 日本生産性本部, 2017, 「働くことの意識」調査.

日本労働研究機構, 2001, 『大都市の若者の就業行動と意識－広がるフリーター経験と共感－』研究報告書No.146.

労働政策研究・研修機構, 2012, 『大都市の若者の就業行動と意識の展開－「第3回 若者のワークスタイル調査」から』労働政策研究報告書No.148.

労働政策研究・研修機構, 2013, 『大都市における30代の働き方と意識－「ワークスタイル調査」による20代との比較から』労働政策研究報告書No.154.

³ 「第7回勤労生活に関する調査」(全国20歳以上の男女4,000人を対象に、層化二段系統抽出法によって抽出)は、フリーターをどのような働き方と考えているのかについて2000年から3年ごとに尋ねている。「生活を不安定にする働き方である」と考える割合(「そう思う」「まあそう思う」の合計、以下同じ)は2000年には79.6%であったが、2007年に88.0%と最も高くなり、2016年には83.9%となった。「自由で多様な働き方である」とする割合は2000年に35.7%、2007年に26.8%と最低となり、2016年には32.8%であった。